

不登校に関する協働的な会の運営の成果と課題[†]

川原 誠司*
宇都宮大学教育学部*

本論文は、2009年度に教育臨床部門臨床心理研究分野で実施した「不登校について学び・つながる会」の実施について報告したものである。この会は、不登校の子どもに関して関心を持つ様々な立場の者が一堂に会し、情報交換を行いながら他の立場との齟齬について修正することを意図して企画したものである。

会の回数が進むにつれ、保護者以外の他機関の専門家の参加はほとんど無くなり、当事者の子どもの保護者や他機関の専門家が一堂に会することの難しさを実感した。また、筆者から見て多少疑問を感じる参加者のあり方を分析して、課題となる部分について考察した。その一方で、最後まで継続して参加して下さった方に聴き取り調査を行い、会の利点と成果についても考察した。

他機関の方をどのように協働の輪の中に組み込めるかという大きな課題は残されているが、継続して参加した保護者の子どもが変化を見せたり、個別の教育相談に踏み込めたりと一定の効果は見られたと言える。

キーワード： 不登校、協働、保護者、諸機関、聴き取り調査

1. 会を作るに至った経緯と趣旨

昨年の論文において(川原, 2009), 筆者は不登校の子どもに対するプログラムを2000年度から9年間企画したものの(川原, 2005), 近年は工夫しても参加数や参加状況の改善につながらないため、プログラムを一度中断し、状況の変化に応じた方策を考慮しなければならないことを述べた。

その中で、最も感じていたのは諸機関の間の不登校に対する対応の齟齬であり、その改善に向けた取り組みが必要なことを感じた。この点は学会等でも報告したが(川原, 2007), その際の指摘でも不登校に関してコーディネートするところが見あたらないという指摘を受けた。

コーディネートにまで至れるかはともかく、関係する大人が一堂に会して、不登校に関して感じる疑問を率直に呈示して、意見を交換することは重要であると痛感したので、協働的な機会を筆者の方で用

意できないかと考え、「不登校について学び・つながる会」という名称をつけ、立ち上げることにした。

この会の趣旨としては、前述したように、様々な機関(様々な立場)の人が一堂に会して、情報交換することであるが、その中である程度の意見の食い違いに直面しながら、自分の考えや状況のみに固執するだけでなく、他者(の立場)の話にも耳を傾けられることを望んだ。

したがって、よりよい方向に向かうように「他の意見を採り入れる」「他に意見できる」ようになることを目指そうと考えた。単なる「集う会」ではなく「学び・つながる会」としたのも、他者からの(への)意見という点を意識したからであった。

2. 実施にあたっての準備

図1のような案内(パンフレットやポスター)を作って、栃木県内の小・中・高校に配付したほか、県内の公民館や図書館などにも掲示を依頼した。また、前年度の3月(2009年3月)に当部門当分野で実施した不登校についてのシンポジウムの際にも案

[†] Seishi KAWAHARA*: The Results and Problems in Managing a Collaborative Meeting Concerning about School Non-Attendance

* Faculty of Education, Utsunomiya University



図1 会の案内ポスター

内を配付し、また4月に入ったら各新聞社にも掲載を依頼し、複数の新聞で会のことを取り上げていただいた。

3. 会の概要

だいたい月に1回ほどのペースで、1年間で11回実施することができた。各回の概要について表1に載せる。多方面の参加者から進め方について意見を求めて、自主的に対話する力も活かして会の進め方を決めていこうとしたが、数回の進行で参加人数がこぢんまりしたこともあり(参加状況については4.で述べる)、また、その参加者がほとんど不登校の子どもの保護者であり、等質性が高くなったので、結局、次のようなスタイルが確立した。

今回のテーマについては、会に参加している方から意見や希望を募り、できるだけそれに沿う形で決めた。そのテーマに関連する事前課題を筆者から出し、参加者の意見や考えを事前に集約した上で、会において呈示して、それに関して参加者のグループで話し合いを持ってもらったり、筆者の方から説明

表1 「不登校について学び・つながる会」の概要

【第1回：4/25(土) 14:00~15:30】	初回ガイダンス、顔合わせ、参加者自己紹介
【第2回：6/6(土) 14:00~16:00】	多様な期間の対応の異同について
【第3回：6/21(日) 10:00~12:00】	子どもの気持ちに届くようにするには
【第4回：7/12(日) 10:00~12:00】	子どもの高校への進学に関して
【第5回：8/8(土) 13:00~15:30】	子どもの生活パターンについて
【第6回：9/6(日) 14:30~16:30】	子どもの今後(将来)について
【第7回：10/25(日) 14:00~16:00】	親子・夫婦のコミュニケーション
【第8回：12/13(日) 14:00~16:30】	茶話会
【第9回：1/11(祝) 14:00~16:30】	カウンセリングというものについて
【第10回：3/7(日) 14:00~17:00】	子どもとの関わりについて自分自身の振り返り
【第11回：3/14(日) 14:00~17:00】	子どもとの関わり方の専門的見地からの学習

や解説を行ったりするというスタイルである。

個別的教育相談ではなく、会合形式なので、一人ひとりの制限枠を考え、自分の話す時間をコントロールする意識を持ってもらうことに努めた(同時に、自分の話を十分にしたい場合には、個別的教育相談が向いていることも話した)。グループでの話し合いの場合にも、時間制限を設けて、その中で全員が発言できるようにする意識を持つように指示した。

それでも発言時間にはたいぶ偏りがあり、時間内に終わらない方も多かった。しかし、「学び・つながる会」なので、不登校について単に集まって、それぞれのグチをこぼすだけではなく、他者の意見を参考にするように意識してもらうように留意して、指示を出した。

ただし、グチをこぼすという集団の機能も大事な

表2 「不登校について学び・つながる会」の出席状況表

参加者	第1回 4/25	第2回 6/6	第3回 6/21	第4回 7/12	第5回 8/8	第6回 9/6	第7回 10/25	第8回 12/13	第9回 1/11	第10回 3/6	第11回 3/13
1	○	○	○	○	○		—	—	—	—	—
2	○	○	○	○	○	○					
3	○		○								
4	○	○									
5	○	○	○		○						
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
7	○	○	○		○	○		○	○	○	○
8	○	○									
9	○					○					
10	○	○	○	○		○	○		○	○	○
11	○										
12	○	○	○	○							
13	○										
14	○	○	○	○		○		○	○		○
15	○										
16	○		○	○		○		○	○		○
17	○										
18											
19	○		○								
20	○	○									
21	○	○									
22	○		○	○		○					
23	○	○		○			○				
24	○										
25	○		○	○	○			○	○		○
26	○				—	—	—	—	—		
27	○										
28	○										
29	○		○	○							
30	*	*	○	○							
31	*	*	*	○	○	○	○	○		○	○
参加人数	28人	13人	15人	13人	7人	9人	4人	6人	6人	4人	6人

注1) — のついたところは、退会の意思を連絡してきたので、以後の連絡を取る必要のない部分を示す。

注2) * のついたところは、途中から入会したので、参加できなかった部分を示す。

ものであることは理解しているので、会の合間の休憩時間には筆者からの不必要な関与を避け、口を極力挟まず、参加者のフリートークを尊重した。

4. 参加状況からの分析

参加状況について、表2に全部の出席状況を示した。のべ30人を越える登録があった。参加者の多くは不登校の子どもの保護者であったが、学校関係者、医療関係者、心理職関係者、不登校支援関係者など様々な立場の人が登録し、初回の会に出席した。

しかし、5回目以降から、参加人数は10名を切り、最終的に最後まで継続参加した方は7～8名という状況であった。登録者に比して参加者が少ないことは、このような自主的な会を行うときに起こりえる

ことではあるが（「とりあえず登録」という状況）、ほとんど参加せずにやめているという状況の分析をそれ以上に丁寧に行わなければ、次年度以降の会のありように影響すると感じた。

まず、この会の趣旨からして残念だったのは、子どもの保護者以外の教員や他機関の専門家の継続参加がほとんど無かったことであった（唯一、教員1名の方の継続参加はあった）。この状況は子どもの保護者が参加することで「自分の思惑と異なる」との思いがあったのかもしれない。事実、後述する継続参加者のAさんに対して、会に参加している知り合いの学校関係者が「自分には向かない」という主旨の話をしたとのことだった。前述したように、保護者が個別の話を制限枠を越えて話をするような状況が続けば、「対応の仕方」を「専門的に」検討することからは程遠いと感じたものと思われる。

その点で言えば、他機関の専門家がなくなったのは、当事者の保護者とは「一線を画したい」ということもあるのだろうと筆者には推測される。確かに、保護者の話に巻き込まれてしまうことは、日常の職務とほぼ変わらない辛い状況を生起させることもある。ただ、そのような保護者に専門的な意見を述べながら冷静に耳を傾けるように促せることも、このような場の意義だと感じていたので、他機関の方がほとんどいなくなったことは残念だった。

適切な距離感を保つことは専門職の支援関係において重要だが、「一線を画しすぎると」「援助者―被援助者」という関係性の中に「正常―異常」「善―悪」「有能―無能」といった差があまりにも生じやすくなり、疎遠になりやすい危険性も孕むと思われる。医療の対応の問題を以前に触れたが（川原，2008）、会の中でも保護者の中から専門職の方の“よそよそしさ（e.g. 医療関係者が診断のみで終わり）”や“無責任さ（e.g. カウンセラーが「お母さん大丈夫ですよ」という言い方のみ）”を不安視する声も出てきた。専門職の方がそのような対応をすることには、その状況下でのそれなりの意図があるかもしれないのだが、仮にその意図があるとしても、それが保護者に十分に伝わっていないことがうかがえた。

もう少し近い距離を保ちつつ、立場の違いをある程度しっかり述べられることで、共感しながらも、役割の違いを意識しながら適切に区別できる関係が形成できるのではないかと感じる。その意味では現在の不登校状況への専門的な方の接し方への懸念として、浮上してきたものであった。

一方で、保護者の中でも参加が継続しない方もいた。3. のところで、「学び・つながる会」なので個人のグチのはけ口だけではないことを述べたが、学ぶための課題にしっかり答えたり、自分の発言に制限が設けられることに抵抗を感じた方が参加を忌避したのではないかとと思われる。「とにかく自分の状況について困ったということ伝えてたい。しかし、自分のことをじっくり語ったり、その際に問題点を指摘されたりするのは、自分のあり方を深く見つめなければならないので敬遠したい」と感じるような方にとっては、今回の会は非常に億劫だったのかもしれない。

また、「学び」というときに、「受動的に講義を受ける」「ヒントをただ与えてもらう」という姿勢でいる方も、課題を出したりグループで話し合ったりす

るといったような能動的な今回のやり方では忌避感を感じやすいのではないかと感じた。巷では、そのような保護者を対象にした専門家への講演会もあるだろうし、そのような講演内容を個別の状況や当事者の個性を考えずに「鵜呑み」して自分の子どもに使おうとすることもあるだろう。筆者は不登校の改善を関係性（社会的関係）の中で行うことに重きを置いているので、保護者自身が他者とコミュニケーションを取れるということが子どもへも大きく影響すると考えているので、会で述べる「学ぶ」とはそのような意味だということ伝え、会に参加するレディネスを示した方がよいのかもしれない。

また、「自分の子どもが学校に行きはじめてので、参加をやめる」という理由で登録をやめて、出席しなくなった方もいた。保護者の参加動機の大部分は自分の子どものことであることはいままでのことであろうが、それが解決したら、他の人のことに目が向かないのは残念なことではあった。「つながる会」という表現には、保護者同士でもつながるという意味が込められているが、改善したという方の体験を他の方にも肯定的な影響をもたらせるようなネットワークづくりを考える必要もあるだろう。

5. 問題となる参加の仕方から見た改善点

参加しなかった方の理由の推測を行ったが、そのような中で、あるいはある程度参加している方の中で、参加の仕方の様子が「学び・つながる会」という面からは多少違和感を感じる例もあった。実際の事例を取り上げながら、そのことについて具体的に考察する。なお、事例の説明の場合には、本人が特定されないように主旨を損なわない範囲で一定の改変を加えたり、ある程度曖昧に表現していることをご承知おきいただきたい。

<Xさん>

フリースペースでアルバイトをしている方。自分のアルバイトしているところに来れば、子どもはよくなるという信念を強く持っており、ことあるごとに自分のフリースペースの話をする。学校の批判をし、学校に行っても子どもの成長は見込めないとし、自分のところのやり方だと間違いないという言い方で、参加している保護者たちに強く勧め、休み

時間などにも熱心にチラシを配付している。

<Yさん>

子どもの保護者。自分の子どもは十分よくなっており、他の人とは状態が違うのだという言い方を常に強調する。しかし話し合いの様子などを見ていると、明らかに自分自身の省察が不十分で、かつ省察を意図的に避けていることがうかがえ、そのようなことを考える回の参加は全くなかった。筆者に向かっても、よくなった状態でのことを筆者と個別に話をしたい（他の方との話し合いではなく）ということをお互いに連絡してきたりする。しかし、個別の面談希望をするわけではない

<Zさん>

子どもの保護者。自分の子どもの話は熱心にするし、子どものあり方を肯定的に捉えていることを強調するのだが、他の参加者の話を全く聴かない。会の中で自分の話を長々としたあと、他の参加者が話し始めると、自分の携帯電話を平気でとりだし、メールを打ったりして、それに没頭してしまう。

以上のような例から、「つながる」ということの難しさを感じさせる。いずれも自分のことが先行したり、自分の抱える問題から目を背けてしまうように思える。1ヶ月に1度の集まりのペースでは、そのような状況に対して参加者同士で注意する関係にまでなっていないので、他の方も黙っていたと思われる。しかし、印象には残っていたようで、次に述べる継続参加者のインタビューの中で、会で印象に残っていた人の名前を挙げてもらうと、Xさんの名前が複数名から出てきて、印象を聴くと「自分のところの話しかしない」「熱心なのかもしれないが、自分のところの宣伝ばかりする」という内容であった。

Xさんのような人の参加はあり得るだろうと筆者は考えていて、筆者から見てひどすぎたり他の方から苦情が出たら、それなりの注意をする予定でいたが、突然参加しなくなった。おそらく誰も自分のところに興味を示さなかったので、「当てが外れた」のだろうと思われる。その意味では、保護者の立場に本当に寄り添っているとは考えにくい。

YさんやZさんの場合は同じ立場の保護者と交わることすら難しいという問題を抱えていた。Yさんは意図的に違いを強調したが、会に登録・参加した

ということは、他の人と同じような問題を抱えていることは容易に想像できる。それを外に出せない防衛の強さは子どもにも影響すると考えられるのだが、それを考えるような回にはあまり参加していなかった。Zさんについては、自分のことしか頭の中をめぐっていないのだろうと思われる。少人数の会で、他者の話に耳を傾けない様子は、現実の子どもの不登校状況においても他者とのやりとりを閉ざしているのではないかという危惧を感じた。

これらの点を改善するには、「つながる」という意味を丁寧に説明して、会を維持するためのルールをより明確にしていく必要があるのかもしれない。そのルールを守ってもらうことが、ある意味で保護者の心理教育になるとも言える。

6. 参加状況が良好な方の聴き取り調査から感じられる意義

問題点を改善する一方で、会を良好に発展させるためには、今回の会の肯定的な部分をさらに伸ばし、アピールする必要があるだろう。年間を通して出席率がよく、筆者から見ても生き生きと参加していると感じた4名の方々に聴き取り調査（インタビュー）を依頼し、会についての印象を語ってもらった。インタビュー時期については、1名の方が第11回（最終回）の直前であったが、残りの3名の方は全ての回が終わった3月後半であり、会や筆者への影響を意識して遠慮するようなことはほとんど無い状況下で行った。

対象となった方は全て保護者であり、自分の子どもが不登校状態を示している（いた）。それら4名の方の聴き取り内容の要約を以下に示す。

<Aさん>

最初の参加動機は、自分の子どもの不登校状態について、どうしたらよいか情報を求めていた。対応策を知りたい。参加し始めの4月当初はカウンセラーとのつながりもそれほど無く、何でもいいからとにかく良いことを得たいという思いだった。

参加してみて良かったことは、同じような立場でないと分からない話ができたと。例えば、学校のある特別活動に参加しても、そのあとの通常の学校生活には参加できないという話をしていた保護者が

いたが、自分の子どもにも同様のことが起きた時に慌てずにすんだ。

参加者が減ったが、やはり最後は保護者が残っている。本当に「救い」を求めているということだと思ふ。その中でも残った保護者は何らかの意味で積極的。自分自身についても、積極的な性格ではないと思ふが、この会だけは継続できた。

継続できた理由は、自分の救いになるという思いがあるし、仕事柄子どもと触れる機会もあるので、不登校に限らず子どもの理解という点でも興味深かった。参加している期間中に自分の子どもが学校に通い始めるという改善が見られたことも大きい。

筆者からいいことを教わった。会は勉強する場であった。筆者が全体から眺める味方を呈示してくれたのがよかった。スクールカウンセラーは個に沿った視点を与えてくれるが、それとは異なるが、それでいて自分の子どもを見つめる有益な客観的視点を与えてくれた。会の参加者が少なかったことが幸いして、その視点を基に自分の事例にまで踏み込んでもらったことがよかった。

会から得られた自らの課題は、自分に論理性や理路整然と考える力が足りないということ。会の中で行った分析課題の結果を筆者がコメントした時に実感した。

<Bさん>

最初の参加動機は、勉強会のような感じだったので参加できるかなと感じた。個別の相談は他所で行っていたが、参加当初は大分混乱していて、自分の悩みの深いところまで話すような場であれば、行けなかったかもしれない。

参加してみて最初の印象は、参加者が暗いなあとということで、隣の席には「うつ」と自称する方もいたりした。ただ、担当者(筆者)は明るく、和気藹々とした雰囲気醸し出していた。そのため皆で悲しい雰囲気にならないのがよかった。

継続できた理由は、課題設定を自分で決められ、内容によっては参加を遠慮できる自由度の高さが自分の性に合っていた。参加者が減っていったのは、課題等が与えられたことや、それについて話し合うという方法を好まなかったのではないかと。また、一方的な伝達による即効性のある指示を求めている人には大変かもしれない。「何とかしたい」という思いを芯に持っているかどうかを大事。

筆者に対する印象としては、明るい感じで、押しつけるような言い方でなかった。子どもの学校の教師やカウンセラーは「暖かく見守りましょう」としか言ってくれないが、筆者からは利用できる大事な視点を聞いたという感じ。特に印象に残っているのは、「自分が登校してほしいという気持ちを持っていたら、伝え方に工夫は必要だが、『登校してほしい』という思いを伝えること自体は何ら悪いことではない(子どもがそれを聞くかどうかは、別問題として扱う)」ということ。子どもを刺激しないという思いにとらわれて、自分の思いを何ら話せないというもどかしさを今まで感じていた。

会で得られた自らの課題は、自分自身のことを見つめることの重要性。自分の性格を見つめ直すよい機会となった。

<Cさん>

最初の参加動機は、紹介の記事に書かれていた「多方面とのつながり」ということで、意見交換ができるものと考えた。自分の子どもが不登校ということでいろいろな本を読んだところ、立場によって書き方が全く異なった。その違いに触れることができるかもしれないと感じた。

参加しての印象は、最初は人数が多くて收拾がつかないような状況。聞いてほしい人がただ発信していることもあった。自分でどう取り入れればよいのか考えさせられ、うまく整理できない人はやめていったのではないかと。結局、考え方ややり方が似ている人が残ったという印象で、素直に言いやすい場になったし、癒せる場になった。会が終わり会場の部屋を出て、駐車場に向かう途中でも参加者同士でいろいろ自由に話をし、気心知れる関係になった。

継続できた理由として、筆者が呈示したものが今まで読んだ本の中に無いものだった。最初の動機が叶う場にはなっていないが、参加しつづけられたのは、筆者の話ややり方が非常に興味深かったためだと感じる。自分のことを見つめる機会になり、一番印象に残っていることは『学校に行ってもらいたい』という自分の気持ちにウソはないということであった。それを通して、自己概念のずれという問題を考えられた。筆者は会において「センセイ」らしからぬ雰囲気ですべて接してくれて、それもリラックスして参加できる要因だった。

会から得られた自らの課題は、自分が理詰めをや

りすぎるといふ点。「余裕」や「遊び」といふものをうまく入れることが大事だといふことを実感した。以前は「のびのび」といふと「野放し」にしてしまうのではないかと訝しい思いであったが、今はこの2つの違いが実感できる気がする。

<Dさん>

参加しての印象は、意外に不登校の人が多くと思えたこと、原因は様々でいろいろな人がいるのだといふことであった。最初の頃はほとんどの人が「うちの子は、うちの子は…」といふ感じの話し方だったが、回数を重ねるに連れ「これからは……」といふ前向きな言い方へ変わった気がする。最初の頃はテーマを呈示しても、それを無視して自分の話ばかりといふ状況も見られた。

継続できた理由としては、残っていった参加者の雰囲気であった。保護者の熱心さはやはり大事で、あきらめないといふ思いが継続意識の差につながっているのではないか。途中でやめた人はもっと直接的なアドバイスが一方的にほしかつたのではないか。自分の中で1つでも「これは」といふものを見つけられたら参加は継続できる感じがする。最初まで残った参加者集団は居心地がよく、お茶飲み話や息抜きができたのもよかった。

筆者のアドバイスは有益なものも多く、家に持ち帰って伝えようと思ふものが多かった。会に参加している期間に子どもにも実際に変化があり、会の内容を実感した。自分が印象に残っているのは、子どもが体調が悪くて辛いといふ状態のときに、そういう状態をうまく共感しながら、自分の思いも大事にすることができた。つまり「体調が悪くていけない」といふ子どもの苦しい思いがあることは認めるが、それは行かなくてよいといふことではないし、登校してほしいといふ自分の思いを否定されるものでもない」といふ捉え方ができるようになった。

会から得た自らの課題は、自分の接し方としてもう少しおおらかに接する意識を持てればといふことであった。子どもの行動の見方（理解の仕方）を学んだことで、そのことが少しでも子どもとの関係に好影響が出ればと思っている。

4名の方の聴き取り内容から、保護者として参加する場合に、「積極的であること」「自分にとって何が得られると思ふこと」「自由な楽しい雰囲気を享

受できること」「筆者の指摘が腑に落ちる部分があること」といふものが大事であることが分かる。

継続した方が筆者の設定した会の雰囲気や肯定的に知覚してくれたことは、今後同様の会を継続するにあたって大事な要素だと思ふ。「積極的」については、受け身の方に大変であることは4.でも述べたが、一定の自主性を発揮しないと参加していても充実感を感じないことは伝えるべき点であろう。

また、筆者の指摘に関して、自己一致（純粋性）に関する肯定的印象が多くの方から出てきた。不登校の対応において、保護者に「登校刺激するな」といふ言い方がしばしばなされるが、そのメッセージだけでは、いかに保護者が何もできずに苦慮しているかを示している。最近では、表現を変えて「暖かく見守る」といふよりソフトなメッセージになっているように思ふが、ソフトになった分だけ熟慮せずに使われやすくなるだろう。このメッセージの内容は確かに悪くはないが、この言い方には「よい保護者になれ」といふメッセージのみが込められ、保護者の思いを率直に子どもに開くことをますます閉ざしてしまう危険性を感じる。つまり「子どもの気持ちは受け取りなさい、保護者は何も言わずいい保護者になりなさい」といふことである。

保護者が率直になるときに、もちろん子どもの率直さを受け取るということも合わせて考えなければならぬといふことは言うまでもない。これがなされていないといふことは、不登校にまつわる専門的な関わりの中で、いかに保護者の思いが無視されているかといふ印象を持つ。「保護者自身の子どもへの好ましくない影響を見つめること」「保護者自身の子どもへの思いを率直に開くこと」とは別の話のはずなのだが、これらが過剰に繋がってしまい、「保護者が子どもに優しくないのがいけないのだ」といふことばかりで、保護者を別の方向から抑圧しているといふ危険を抱く。特に今回のような会に参加し続ける方にとっては、養育放棄のような要素より過保護の問題の方が多く、そのためにも保護者のありようと子どもありようとを別個のものとして認めていくといふ作業の方が、有効性が高くなると思ふ。

聴き取った方々に個性があり、異なる感想もあるが、能動的に参加し、雰囲気や享受し、自分の課題を見つめ、子どもの様子も改善された方もいることから、この会の一定の効果はあったと思ふ。

7. 会についての今後の課題

今年度の参加者の実情を見てみると、保護者が主要な登録者であり、継続状況を見ても保護者の会とあまり変わらない状況だが、今後も保護者のみに限定することはしない。保護者を意識するが、さらなる参加者を求めるためには、そして他機関の方を協働の輪の中に加えるためにはどのようにすればよいかを以下に考察する。

(1) 筆者の特徴と会の特徴との明瞭な伝達

会を運営する主体は筆者であるので、筆者の特徴を早期に知ってもらうことは重要なことだろう。前述のAさん～Dさんの聴き取りでも、筆者の話の内容、筆者の醸し出した雰囲気、筆者と他の専門家の違いまで、筆者についての様々な感想があった。

聴き取り調査の対象者は継続できた方々なので、印象が悪いとは考えにくいですが、逆に、参加しなかった方は筆者や筆者のやり方に対して、快く思わなかった人もいると考えられる。全ての方を快くさせることは理想だが、現実的には難しいので、少なくともそのような判断を早めに行えるように情報を呈示し、行動を支援することは大事だろう。

同様のことは、会の特徴についても言える。一方的に指示することが全くないわけではないが、最初から最後までそのようになるとは、筆者の性格上考えにくい。会がそのように運営されていくことを早期に感じてもらい、それが保護者にとって大事なことを伝えていく必要があろう。

(2) 学び・つながることとリラックスすることのバランス

筆者が一方的に講義して、それを黙って書き写すような会だけになってもいけないし、その一方で単なるおしゃべりをする会だけになってもいけないと感じる。保護者の参加が今後も主になることが推測されるので、保護者にとって「学ぶ」「つながる」という内容を伝えなくてはならない。ここで言う「学ぶ」「つながる」とは「自己を見つめること」「自分のあり方を明瞭にされること」を多分に含んでおり、そのような掘り下げ作業もあることは念頭に置いてもらう。今回の継続参加者は自分なりの課題を見つけたことで、子どもの関わりに変化をもたらしたと感ぜられる、そのような意識を持つことは自分が変

わるためには必要不可欠なことだろう。

その一方で、参加者同士が互いにリラックスしたり、つながったりすることも重要である。一方的なグチのはけ口にはならないが、参加者同士が同じ関心を持つものとして、自分の苦しみについて感情を分かち合い、通じ合う部分が持てることは重要である。そのような感情の率直な開示も進めたい。

これら2つが、適切なバランスを保って進められるように、これからも工夫していく必要がある。

(3) 他機関の方の何らかの参加方法の工夫

今回の会で、専門機関からの人はほとんど参加が継続しなかった。その理由として考えられることはすでに考察したが、とは言え、現実の治療やカウンセリングが専門機関で行われていく以上、これらの方々を視野に入れて、直接の交流がなければ、不登校の子どもの包括的な支援にはならない。

その意味では、専門機関の方を単発で外部講師やゲストといった形で招聘し、その中で意見交換を行うことで、それ以降も会の話の輪の中に加わってもらえるかもしれない。専門機関の方からも忌憚のない話をしてもらうことは、保護者が自分自身のことを考えるきっかけ作りになるし、専門機関が信頼される場になるためにも必要なことなのではないか。

引用文献

- 川原誠司 (2005). 不登校の子どもの対象としたプログラムの経緯と課題—4年間の取り組みから見えてきたもの— 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 28, 35-46.
- 川原誠司 (2007). 不登校の子どもの教育心理学的な働きかけが可能になるには —子どもに関わる他機関との齟齬の省察— 第48回日本児童青年精神医学会総会抄録集, 291.
- 川原誠司 (2008). 学校での発達・成長に関する精神医療的「見方」の影響—不登校傾向の子どもの事例より— 第49回日本児童青年精神医学会総会抄録集, 297.
- 川原誠司 (2009). 不登校傾向の子どもの対して教育心理学的介入が可能になるには —他機関との齟齬の考察— 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 32, 17-24.